

## 会 議 録

内容承認	公開・ 非公開	<開催日>令和元年12月20日(金)	<傍聴人数> 0名					
藤田会長 木下副会長 中井委員		<時 間>午後13時～15時	<傍聴室>					
	公開	<場 所>	岸和田市立福祉総合センター					
		3階 講座室2	3階 講座室2					
<名称> 第5回岸和田市産業教育審議会								
<出席者> ◇岸和田市産業教育審議会委員 (○出席、■欠席)								
香月	北野	木下	杉山	武林	中井	中野	藤田	増谷
○	○	○	■	○	○	○	○	■
◇関係者 高橋中学校校長会会長 ◇出席者 樋口教育長 ◇事務局 (教育委員会関係) 藤浪教育総務部長・谷学校教育部長・高井教育総務課長・倉垣学校教育課長・ 石井指導主事・田井指導主事 (産業高等学校関係) 楠戸校長、大西教頭、榎本教頭								
<議題等> 1. 開会  2. 議事 (1) 産業教育審議会答申にむけて (2) その他 (3) 事務日程について  3. 閉会								

【藤田議長】

ここからは私が議事を進行させていただきます。

まず、本会議の署名委員として中井委員を指名いたします。よろしくお願いいたします。

本審議会におきましては、前回まで岸和田市立産業高等学校のより良い教育環境を整備し、充実した産業教育を実現するため、委員並びに関係者の方々のご意見をいただき、審議してまいりました。今回は、答申の素案をもとに、答申作成に向けた審議をお願いしたいと思いますので、みなさん、どうぞよろしくお願いいたします。まず、資料1と資料2をお目通し願います。

では資料2の方をご覧ください。前回の会議におきまして、前回提示しました原案を説明申し上げたうえで、議論を進めてきたところですが、その後、校長先生、教頭先生に少し実態等のお話を伺いまして、改めて実現性があまりない抽象的理想論的な答申案を作成してもあまり意味もなかりょうということもありまして、少し現実的なところを伺いつつ、なるべく理想を取り入れた形で提案していきたいということで、今回あらためて資料2という形でまとめさせていただきました。

ではこれについて説明を申し上げたいと思います。今回の審議会に関しては、全日制および定時制の2つの課程について、産業教育をいかにすべきかということが今回求められているところですが、特に既存の商業科について、どう今後の情勢を見ながら改編を進めるか再編していく点について議論をしてきたところでございます。そのための学科再編というところで課題としておよび考慮すべき制約というのが前回までの会議の中でいくつか上がってきたところでございます。

解決すべき課題に関しては前回も述べたところですが、入試の志望倍率が商業科および情報科の間で不均衡が起こっている。その結果、入試制度の問題を含めて、いわゆる不本意入学という形での入学者がどうしても生じてしまう。一方で、そういう中であっても入学してきた生徒たちの個性や希望も多様ですので、そういった点に応じた多様な教育や進路というものを実現していかなければならない。そして、それらを達成するためには、基礎学力の定着というものが不可欠であるということが出てきている課題です。

一方で今までの産業高校自身の取り組みとして維持すべき長所というのもあります。それはまず特色ある教育として商品開発等の取り組みをしてきているといった部分は生かしていくべきであり、かつ就職にしても進学にしても多様な進路を選択できるといった点についても維持していかなければならないという長所であると思います。それとともに部活動や資格取得といった点でも多様な自己実現という部分を生徒に対して担保し、そういったところを今後の学科再編に関しても維持していくべきであろうという所も前回までの議論の中で確認したところです。

ただそれらを踏まえて前回いくつかの方向性というのも提示したところでございますが、その会議の場におきましても、また校長先生や教頭先生にお話を伺って出てきたいいくつか考慮しなければならない制約条件というものが存在しているところです。

ここに挙げた4点が主なものになるかと思いますが、施設・設備というものの制約が存在しており、分かりやすい所ではパソコンの台数、教室等の設備の問題というものが大き

くあり、それとともに教職員数の制約というのもある程度存在しているだろうということです。生徒指導上の制約としてこれが大きくなっているというところです。それとともに専門高校という学校の性格上、教育課程の制約というのもまず存在しており、どうしても専門科目というものが履修の中心となってくるという部分もありますし、そういったものと絡めての資格取得という部分の学習というものの必要性、いわゆる付加価値づけというのも必要になってきます。それとともに大きな課題と思われるのが、入試制度の制約が存在しているというところです。制度それ自体、若しくは実施時期の問題というのも大きく絡んでくると思いますので、こういった部分が大きく考えなければいけない課題ということになります。

それらを踏まえて課題が出てきたわけですが、前回提案した案の中でも、不本意入学というものの本質的な解消というのはなかなか難しく、入試制度を改変しても、本質的解消というのは難しいと思いますが、なるべくそういうミスマッチを減らさなければならぬというところがあります。

前回プログラム制を提案したところですが、学科間不均衡がプログラム間の不均衡に変わるだけですので、あまり意味がないのではないかとということです。それ以上に複線的なプログラムというものの展開が、現実に配置されている教職員の数では難しいというところがもう一つ大きな問題として存在しています。仮にそういったプログラムで実施により生徒のニーズの偏りが起こったときにカリキュラムを達成できないのではないかと懸念もあるということをお聞きしております。

それと同時に、進学にしても就職するにしても、進路決定の時間的なリミットが存在しており、進路決定までに学習時間や資格取得のための学習時間をきちんと確保することが、複線的なプログラムにしてしまうと難しくなるのではないかと懸念があるということもお伺いしております。そういったところを少し踏まえ、前回の案を基本的には踏襲していますが、今回は以下の4点を踏まえて変更した案を提示したいと考えております。

1つは入試制度の変更です。従来の前後期制という入試制度から切り離して新学科を分離・設置しておくということがあり、その新学科に対しては既存の長所を生かしたカリキュラムいわゆる商品開発であるとか新しく考えてきたグローバルのビジネスのあり様といったもののカリキュラムを設定すると、学科制といったところで基本的には定員管理というものが伴いますので、著しく希望が偏るという事は入学後にはなくなるようにきちんと設定していくということです。また指導機会もきちんと確保していき、インターンシップや地域連携による学びというものを確保していくことと合わせて資格取得を前提とした進路選択の実現もこれで担保していければ良いのではないかとということで、次ページのように学科等の改編案というものを考えました。名前は案ですので今後また考えていただければと思いますが、商業科を2つに割り、いわゆる既存の旧商業科を継承してオーソドックスな簿記会計の学習を中心に進めていく企業会計マネジメント科を3クラス、そしてビジネスデザイン科という形で新学科1クラスを設置すると、企業会計マネジメント科はあえてプログラムに分けなくてもいいかと思いますが、こういった資格取得をするのかを

ある程度目的別に、経済系の科目もしくは商学系の科目を選択して履修する形ぐらいはあってもいいかと思いました。ビジネスデザイン科の方に関しては、商品開発部の経験を生かした企画戦略のプログラムを1つ作り、そしてもう一つはインバウンドのニーズ等を考慮したグローバルプログラムを設定する、こういう形で分けてはどうかということで案を提示したと思います。将来的にはこれらの学科を2クラス体制でしていければいいかというふうに考えております。

一方で定時制課程に関しては、解決すべき課題が大きくは3つほどあったかと思えます。1つは入試倍率の低迷もしくは定員充足の観点での課題と、そして前回出てきた大きな課題としては多国籍化、多言語化という課題があり、様々なバックグラウンドを持った生徒の入学が近年増えてきており、それとともに一部高齢の方も入ってこられており、こういったところへの対応というのがどうしても必要になってくると、そういった部分を踏まえてのニーズの多様化というのも起こってきているということがあがってまいりました。

それらを踏まえた上で維持すべき長所というのも当然定時制課程にもあるということでございます。それは多様な学びの実現というところに帰結するところがあると思えます。いわゆる働きながら学ぶという機会をきちんと提供できるということ、そしてそれとともに不登校になってしまったりとか引きこもりになった後にもう一度きちんと学ばなければいけないという形で再入学したりとか、さらには先ほど申しました通り高齢になってからでも学びたいといったようないろいろなニーズを抱えた方々が、多様な学びを実現されているので、この形は崩さない方がよからうというふうに考えております。

それとともに進路選択の柔軟性という部分も存在しておりますし、多様な自己実現というものも達成されてきたというところだと思います。こうしたところを踏まえて、前回あまり明確な提案というのは無かったですが、商業化のニーズが多様化しているということ、そして多言語化、多国籍化が生じてきている、そういった部分で一般的な課程という部分を充実していった方がよからうということもでございます。

さらに、これは必ずしも高齢化という部分に限った事ではないですが、いわゆる定時制で言うところのニーズが低くなってきた一方で、そこに新しいチャンスというものを見いだせないかということでリカレント教育という部分の充実強化といったところをここで担うことができないだろうかということで考えてみたところでございます。

ということで以下の案を提示したいと思いますが、いわゆる旧商業科、いわゆる定時制課程という形で存在しているところを定時制の総合科という形に変えて、そこに1つ、2つのコースを作り、普通科的な部分と商業科的な部分を担うコース制をとれないかと言うことでいかがかというふうに考えたところでございます。特にその企業会計コースのほうにリカレント教育という部分で資格取得であるとかスキルアップを目指す受講者を一部受け入れる形で商業科目等の勉強をしてもらえる形をとれば、一定のニーズが存在するのではないのかと考えたところでございます。

それと合わせて前回の会議でも少し出した案ですが、いわゆる多言語化対応というところでスクールカウンセラーの配置、これは必ずしも専任という形でなくてもいいかと思

ますけれども、ボランティア対応を含めたスクールカウンセラー等の配置というものを進めていく必要があるという風に考えたところでございます。

ここまでがいわゆる具体的な今回の骨格というか骨子となるような提案でございますけれども、それ以外に記載すべきところとして、下に2つを挙げております。今回は書いておりませんが、他の既存学科、情報科とデザインシステム科の話というのも当然この答申案には書かないといけないというところでございますけれども、今回は省略をさせていただいております。

その他記載すべき内容として、以下2つをここでは挙げておきたいと思っております。

1点目は最近大学でよく言われることでございますけれども、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーおよびアドミッションポリシーの制定という内容です。具体的に申しますと、ディプロマポリシーというのは、この学校を卒業した生徒にはこういった力がちゃんとあるということを明確に宣言するというものであります。それを担保するためにカリキュラムポリシーすなわち教育課程というものがどうなっているのかということを宣言すると、そういった事が大学ではかなり求められてきているというところでございます。そういうものを産業高校はある程度きちんと書かれていると思っておりますけれども、それを改めて明文化して外部に提示するような体制を今後取るべき必要があると考えております。それと後はアドミッションポリシー、いわゆる入学してくれる方に本校ではこういった方を求めていますというようなことを宣言する、そういうものがあるわけですがけれども、そういったものをきちんと提示していく必要があるかと思っております。

この間、保護者のご意見であるとか、中学校の先生方からのご意見という中で、こういった生徒を産業高校に入学させたらよいか、もしくは入学してほしいかという部分のマッチングという部分でこういうものを提示していくということが、今後ある程度高校でも求められてくる部分であろうかと思っておりますので、こういったことを今後検討いただきたいということを盛り込みたいと思っております。

2つ目ですが、ファカルティディベロップメントやスタッフディベロップメントと呼ばれるところで、教職員の方々がちゃんと修養を進めてくださいと、いわゆる自己修養を進めてくださいということを求めるものでございますけれども、高等学校までの先生方は必ず研修が義務付けられていると思っておりますけれども、それ以外にも学校内で先生方だけではなくて生徒の指導にも携わっていく、いわゆる職員の方も含めて学校のあり方、生徒指導の在り方等について理解を深めていく機会というのを設定して頂きたいということです。こういったことを改めて宣言してはどうかということで今回盛り込みたいと考えておるところでございます。

若干最後の2つに関しては、ここまで議論していた内容とは異質な部分でございますけれども、それらを含めて今回答申案として盛り込んでいきたいというふうに考えてございます。以上これが資料2の説明になりますがここまでの話を踏まえてまた本日ご議論をいただきたいというふうに思います。よろしくお願いいたします。ではご意見等ありましたらお願いいたします。

**【武林委員】**

資料2の2番目の商業科を3クラスと1クラスに科として分けると、その横の経済学先修プログラムですが、これについてはコースを設ける形ではなしに、選択科目とかそういうものを履修させるという形でしょうか。

**【藤田議長】**

これはコースと読みかえても結構ですが、具体的にどう書いていいのかよく分からなかったので、大学でよく使っているプログラムという言葉を使っただけで、コースと読みかえても全く差し支えないかと思えます。

**【武林委員】**

コースは2年生で分けるということですか。

**【藤田議長】**

そうです。経済学先修、商学先修というのはあえて分けなくてもいいかと思えますが、例えばこういった資格をめざすのかという点で、ビジネス経済みたいな話を先に勉強したいという生徒がいたりとか、もしくはマーケティングを先に勉強したいという生徒がいたりという可能性を考えたところでもあります。もしそういった差があまりないというのであれば、分ける必要はないと思えます。ただ一方で、ビジネスデザイン科の方ではその辺を少し選択という形になるのか分かりませんが、指導内容としてこの2つのコースに分ける方がよいのではないかと考えたところです。

**【武林委員】**

この3クラスと1クラスという科は、後期入試に導入されるという形でしょうか。

**【藤田議長】**

入試制度に関しては分からないところもあります。特別選抜とはどういう形になのでしょうか。

**【楠戸校長】**

現在されている2月の特別入試は、実技試験や面接を伴う試験になっています。

**【藤田議長】**

ビジネスデザイン科を特別選抜に振り分けると、それ以外の企業会計マネジメント科は従来どおりにする形で考えてはどうかと思えますが、具体的には、私が考えたのはビジネスデザイン科を特別選抜にするということだけであって、企業会計マネジメント科をどうするかということは考えてなかったもので、これは今後議論いただければと思います。

**【武林委員】**

もう一つ質問ですが、3枚目の定時制のことですが、現在、商業科2クラスということで、それを総合科として1クラスに希望者を募集するというお考えでしょうか。

**【藤田議長】**

2クラスになるのか、1クラスになるのかというのは、どういうふうな要件かよくわかりませんが、総合科として募集をするという形で考えてはいかがかと思います。

**【武林委員】**

総合科として募集する。わかりました。質問は以上です。

**【藤田議長】**

他にご質問等いかがでしょうか。

当然ながら、実現していくためには、答申には市に対して、人事要求なり予算要求なりを学校側からしていただくことではあります。そういったものの措置をなるべくお願いしたいということも答申案としては盛り込むつもりではあります。こういった新しい事を進めるにあたっては人、物、金、情報が要ということがありますので、そういったこともなるべくサポートをしていただきたいという事は盛り込む事は考えております。

ここまでの議論をある程度拾ったところではあると思いますが、何かご意見等ありましたらいかがでしょうか。

**【中井委員】**

これを実行したら、現状から何が変わるのでしょうか。

**【藤田議長】**

そこが難しいところだと思いますが、学科としてきちんと設定をしたというところで、これまではどちらかというと特別カリキュラムというか特別な取り組みというところだったものを、制度化するということにつながりますので、そうしたところで育成された生徒が卒業生として地元で活躍するということを一定数担保する、これまでは特別な取り組みということで、学年というか、年度ごとに人数もいろいろと変動があったと思いますので、そういった部分をきちんと1クラス40名という形で育成に変わっていくということになるかと思います。

それ以外でどう変わるかという事は、今のところ予測はしにくい所ではあります。もう一方で変えようとするためには何が必要かということも言いますと、やはり育成する側の教職員の配置の厚みを変えていかないと、これ以上どう変わるかというのは難しいところだと思います。

**【中井委員】**

理想論を言うつもりはありませんが、答申である以上、できなくても理想を入れるべきだと思います。考慮すべき制限ということで入試制度から設備まであったわけですが、産業高校は今の形ですと一概にいけるのかと言うと、これはずっと制限されるわけです。

最初に申し上げたように、財政基盤を変えるとかそういうことを考えていくのも、別に今実現しなくてもいいんですけども、これだけこうなっていると、これは何が変わったのと言われませんか。

**【藤田議長】**

ちょっと看板をかけ変えただけのように見えるかもしれませんが、そういった財政基盤をどうするのかという話は以前あったと思いますので漏れた気がします。そこを踏まえながらどうするかということを書き換えていこうと思います。

**【中野委員】**

財政とか教員配置とか入試の事を言うと話が大きすぎてなかなか進まないです。どこの学校でも困っているのは財政面、教員配置です。今ここで協議していくのはいかに答申を出すのか、答申の元は商業科をどのようにするのか、商業化を他の科に比べて、倍率が低迷していると、その原因は何かということまで話してきたと思うのですが、今ここで提案の商業科をこのように変えるという方向性は分かるのですが、会長が最初におっしゃいましたように、その他の記載すべき事項のところ DP とか CP を少しこの横に入れられたらもっと分かり易いと思います。

今の中学生のニーズがどうなっているのか、商業科を改編するにしても不足しているのは何か、変えなければいけないのは何か、継続するのは何かということをもう一回、これは整理できると思います。その上で、こういうプログラム、どちらかといえばコースということで、こういう生徒を育てるとか、そういうことをそれぞれのプログラムのところに置いていった方が、答申を受けた学校としてもやりやすいのではないかと思います。

**【藤田議長】**

その通りです。実際問題としてやらなければいけないのは、今学んでいる生徒にどんなことを学んでみたいですかというのを調査しないといけないと思います。もし今後そういう機会をいただけるのであれば、そういったところも含めてもしくは3つの DP、CP、AP といったことも含めてもう少し明確に記載をすることができるかと思うのですが、まだ最終答申案は年度末に出すことになっておりますので、チャンスはまだ少しあるかと思っています。中井委員、中野委員からおっしゃっていただいたことに関しては、そういった部分を踏まえてもう少しきちんと練り込むことができるかと思っています。

**【中井委員】**

私は商売をやっております。実業家です。これは参考になるかどうか、最近ある大学で



既存の学部があったのですが、新たに看護学科を創りました。そうすると募集人員の今までの2倍3倍に膨れ上がった。だから、学校そのもののステータスも上がった。1番有名なのは近大の医学部、学校経営そのものを根本的に変えるような情勢になりました。医学部そのものが上がってきたということもあります。岸和田市立ですので、そういうようなダイナミズムというのは無理というのは分かっています。そんなことをやれとは言いませんが、今後学校はどうやって生き残るか、どの学校も必死です。私学はその辺で頑張っています。その中で看板の付け替えだけでいけるのか。現実の制約があるのは分かっています。

我々が商売をやるときは、実際には社内で色々やるのですが、制約について最初に言う場合はすべて議論としてはバツです。制約を乗り越えるためにどういったことをするのか、どういう風なダイナミズムを行うのか、それをどうやってするのか、確かに学校ですから無茶苦茶なことができないのはよく理解しておりますけれども、今の時代というのは大きく激変しております。その中でこの学校が社会に対してどれだけ有益で、どれだけ必要な学校という具合に、どれだけ保護者にアピールできるか、各学校は必死になっております。だから岸和田市立ということだけではなしに、その辺のことを踏まえて、今出来なくても将来どうしていくという考え方はやはりある程度なさったほうがいいのではないのでしょうか。

特にパソコンのことを10年前にやったことで大きな成長を遂げました。それと同じようなことを今回やる必要があるのかという気がします。それと財政的な話ですけども確かに難しいです。しかし2万もの卒業生がいるわけですから、そういう方も含めて一度働き掛けていくというのも決して悪いことではないと思います。現実にはわかりますけれども、これを書いてしまえば何もしないということと同じことになってしまいますから、もう少し前に進めるような形にしませんと、わざわざ何回も集まってやっている意味がないと思います。

#### 【藤田議長】

ありがとうございます。他にご意見ご質問等ございませんでしょうか。

#### 【中野委員】

最初から言っていることですが、結局志願者をいかに増やすかということになると、中学生とか保護者がこの学校のどの科を選びたいかということを決断する1つのポイントが何かなんです。だから商業というのは昔のイメージなので、ハイカラ的な要するに品物で言えば現代的なイメージやデザインが優れているということで選びますので、生徒からこういうことを学びたいということを聞くのも大事だと思いますけれども、結局どのような学校選びを保護者はしているのかということで、そしてその中で、これから教育というのは10年後20年後のことになりますので、こういう人材を育てていきたい、だからそういう人材を育てるためにはこのような学科に改編します、そしてその上で財政的なこととか人事的なこととかについてはこれだけ必要です、というふうに叶えられなくても打ち

出して、叶えられるように努力するようにしないと教育行政は動いてくれないわけです。

入試制度というのは教育行政だと思います。ですから今普通科志向と言いますけれども、人口が減ってきてても10年前20年前と、例えば普通科に行って勉強する生徒、あるいは専門高校に行って勉強する生徒の比率はそんなに変わってないと思います。

要するに最近になって普通科に行った生徒が9割になった、1割に減ってきたとは思わないです。その結果として普通科高校から就職した生徒の離職率が非常に高いというのは、やはり企業と会社との間にミスマッチを起こしている。ミスマッチを起こしている原因は何かといえば、やはり生徒と先生の間あるいは保護者との間でどういう社会人になっていくのか、どういうように自分は大人になっていくのかというところの話ができていないと思います。

ですから産業高校に来てくれたら、こういう力をつけて社会に出します、選んでいただいたら損はさせません、というぐらいのキャッチフレーズで売り込まないと、先ほど中井委員がおっしゃったように民間企業は必死です、私学は必死です、そこだと思います。やっぱり公立という面で行くと、そういうところで本気度と言いますか、もうちょっと出してもいいのかと思います。それで教育行政といろいろ話をしていって、せつかくこの商業の改編という事を言われたのだから、ぜひとも良い方向にいてほしいと思います。いままでの流れはこれでいいと思いますが、今日お示しになったものがもう少し具体的になったら意見がいろいろ言えるのですが。

#### 【中井委員】

企業運営しているのですが、結局高い理想とは言いませんけれども、社会に対してどういう具合にやるか、社会に対して自分たちがやってきたことをどのようにアピールするかというのを求める。今の若い人もみんなそうですけれども、社会的な認知度というか自立してというか、そういうことを認めてほしいという希求性というのはものすごく高い。それを充足してやるような、いつでもそれをできるような教育をどうやってやるかということだと思います。

それは色々なレベルがあると思うので、生徒によって色々やり方違うということも分かりますし、それともどういう具合に表現するかということもなかなか難しいと思いますけれども、先ほどおっしゃられたように、どういうような社会人を作っていくか、どういう職業人をつくっていくか、やはりもう少し大きく欲張ったような形でやりませんと学校自身の存続というか意味合いを非常に失ってしまう。

以前ロボコンとか社会に再認識されるようになったとか、高校を卒業して専門学校へ行く人が増えたとか、大学にいかなくて専門学校に行く方がよっぽど有益だと思っている人がたくさんいる。こういうようなことを含めて、産業高校という名前がある以上、そこに魅力を感じるような方向性というか、確かに現実にはこれぐらいだと思います。

しかし、もう少し何かつけくわえていかないとこのままでは今後10年間経っていけるかどうか、確実に高校は減りつつあります。統合されてしまいますから。ここは岸和田市立なので統合までされないの、どうするかということになると思います。

**【藤田議長】**

他にご意見ご質問等いかがでしょうか。

今回確かにもう少し具体的な話を盛り込もうと思いましたが、ちょっと時間的な制約で示しきれないところがあります。看板の架け替えに留まらない、魅力や将来性という部分をきちんと考慮した形で書く必要性というのは当然あると思いますので、今回はどうしても無難なたたき台で終わってしまっているところもありますので、そこらへんは形として入れていこうと思います。

他にご意見ご質問等いかがでしょうか。

もう一度保護者の方もしくは中学校の先生方からの視点で、もっとこういうことを書くべきだということがございましたら、ご意見いただきたいと思いますがいかがでしょうか。

**【北野委員】**

どうやって保護者と子どもが学校を決めるかというのは、偏差値です。自分が行きたい行きたくないというのを別にして、自分の成績に見合った学校にしか行けない。自分の成績ならこの学校と先生に言われた、親に言われた、塾で言われた、そうやって入ってくる生徒がほとんどです。

でも1つ良いこともあります。全く興味はなかったけれどもやってみたら面白い、もっと追求してみようって思う人も少なからずいます。逆に商業のことが全く自分に合わない、これを知ることすごい将来にとってはいいことだと思います。高校卒業した後に進路を決めるときに、これはちょっと自分には向かない、別の事をしてみようという選択の1つになります。普通科の生徒と違う進路選択ができて、この学校に来たことは子どもにとって良かったと思っています。

**【中井委員】**

それが1番いいのです。私自身も本当は工学部をめざしたかったです。いろんなことがあって経済学部に残ってしまいました。しかしその後経済をやって良かったとずっと思っています。どこかでそういうような偶然が働いてそれが好きになるということは、なんぼでもあります。だから初めからこうだと言って決め打ちするのは子どものためにもよくない。実社会に入ってみればまた役に立つこともあれば立たないこともたくさんありますから、その可能性を子どもの中に見出してあげるということが、我々の仕事だと思っています。

**【藤田議長】**

大学が抱えている問題も全く同じで、特に経済学部は中井委員がおっしゃったとおり、なんとなく来る生徒が多いところです。それこそ偏差値で輪切りにされてというか、センター試験でこの点数しか取れなかったのが、経済学部に来ましたという学生がかなり多いわけです。何となく来た生徒に大学教育の大きな課題がございますので、抱えている問題

の構造的な部分は同じであるわけですが、そこをどうできるかというのがこの問題点の出発点であるわけです。そういう部分で少し現実を突きつめすぎたところもありますので、理想にもう少し立ち返る必要があると思います。

そういう意味では財政基盤というようなお金のことに関しては、以前中井委員からも案が出ていたように、地元の財界と協力をしてという部分も1つ考えられるでしょうし、OB、OGに対して寄付金を募集するというのも1つの方策でございます。そういうことを通じて教育基盤の充実を図るというのも当然あってしかるべきところだと思いますので、お金という部分に関しては何とかできる場所はあると思いますし、もう1つはお金にならない価値と言いますかお金にならない部分での協力というところを地元の方々に仰ぐということも当然求めていくことになろうかと思えます。

それができれば、ビジネスデザイン科の企業戦略なりグローバルというところの内容、たとえば商品開発もしくはインバウンドの観光客にどう観光的なニーズを作り出しているのかとか、もしくはビジネスを展開しているのかという部分で教育内容の充実を図ることはできるかと思えますので、よりそういった部分をきちんと謳っていくというのが1つ答申案の内容としては必要などころではあります。

もう一つは、進路選択というのも、むしろ、これが1番大きな制約だと思います。偏差値とか成績での輪切りという部分は、それを超えるような何かをきちんと訴えていかなければいけない。そこが難しいところだと思いますが、1つは先ほどでた試金石として、ひとつの経験として将来に役立てることができることを訴える部分を用意しなければならないと思います。

#### 【中井委員】

1つの例ですが、ある私学でロボットを作ることを売りにしている。知り合いの子どもさんがロボットを作りたいと言ってそこを受けるということで、それだけの話ですけど、他にもいろいろあると思います。そういうような話はたくさんあると思います。そういう夢を実現できる高校だということもひとつの手だと思います。

だから、運動でというのもありましたけれども、運動も野球からラグビーまで変わってくるような時代ですから、そういう中で魅力的なものをどういうようにして子どもさんに見せていって、それでこういうようにできるという方向もたくさんあると思うのです。あまり絞りきると離れてしまうという可能性もあると思いますが、そういう方策でできるという案もあると思います。

#### 【武林委員】

夏の甲子園で明石商業がベスト4になりました。明石市立です。ずっと商業ということで低迷しておったわけです。だから明石市としてこの学校をどのようにやっていこうかと言うことで議論されたらしいです。そしたらやっぱり野球だと言うことで、野球の監督を募ったらしいです。そしたら7人ほど希望者がこられて、現在1名が明石市の職員として採用されて明石商業に派遣されている。だから野球部の監督として派遣して、成績も選抜

から残していったというようなことを聞きました。だから部活動の活性化ということもやっぱり大事なことだと思います。例えば野球で言えばイチローさんも高校、大学の指導者になれるという制度が出てきております。文科省もそういう人たちを使って働き方改革というのがでてきております。だから例えばイチローさんに来て頂くとか。

一番最初に勤めたところが京都市立西京商業高校というところで、そこで教えたソフトボールの子どもが、田中史郎とってラグビーワールドカップで活躍している選手のお母さんなのです。お母さんとのつながりで40年50年と続いているというようなことにもつながっていくわけです。だから決め打ちとするのではなくというのはその通りです。子どもはやっぱり変わってくるのです。家庭環境によっても変わってくる。それがずっと順調な人生を歩む人はいない。だから急に就職しなければならない、そういう子どももでてくるわけです。産業高校はそれを一生懸命やって、1人1人と大事に向き合っていてやってきたからこそ、定員割れや学校がなくなるというようなことはなかったわけなのです。

だからこれをもう一つ、どういう風にして社会の中で、中井委員もおっしゃったように保護者そして地域のなかに向けて訴えていくかというのは非常に大事なことです。そういう意味でワールドカップのラグビーや高校サッカーの全国出場、そうすると、どんどん寄ってくるのです。サッカーの南野選手も興国高校です。だからそういうのが派生していくわけです。

ビジネスデザイン科のところで、京都市がやっているAIの授業というのがあります。子どもらが喋るのを撮ってどこが分からないというのを出します。そういうのをここでやるとか、ICT教育の先端をここでやっていくとか、そういう他ではやっていないことをやっていったら、いろいろと広がっていくのではないかと、情報科にも、商業科にも。

今の現行の入試で言えば、希望は2つまでです。情報科と商業科で3つはできないわけです。学科が3つになったら、またバランスが出てきます。例えばビジネスデザイン科が定員割れを起こすということにもつながる。今の状況で言えば、これを前期入試に持っていくのがベターです。ただ府と大阪市がどうなっていくのか、岸和田市立として今の状況のもとだったらこれくらいの改革しかちょっとしんどいと思うのですが、あまり早く先行しすぎてしまい、府立に移管とか一緒になってしまうということやったら全然特色がなくなってしまう。ほんまに徹底してやるなら南の地域で、中高一貫を校舎全部立て直すぐらい。中高一貫の進学校に行っている子どもたちは徹底的に理科や数学の基礎を教え込まれます。それが基礎力となって社会に出ていきます。

進路指導研修会に駿台の先生が来られて聞いたのですが、大学生に求められるものの変化ということで、大学卒業に価値があった時代はもはや過去だと、難関大学の卒業に価値があった時代もそろそろ終わり、大学で何を身につけてそれを武器にして、社会人として頭で考えてどう行動するかということがこれからは問われる時代である、そうでないと日本は生きていけませんと。今はこれからの職業の大体65%は存在しない職業に就く言われています。10年20年程度で大体47%の仕事が自動化される、AIによって。こういう時代を子どもたちは生きていかなければいけない。

学習指導要領で商業科の目標は、生徒の発想力を育てて体験的な学びができて、それを

生かせるようなプログラムのもと、そういう体験をさせることが大事なことだと思います。やり直しができるような体験をさせてやって、大事に見てやって、そういうような教師集団、いろんなものを使って教えてやって、育ててやって行ってほしい。だからそれが野球でも良いしラグビーでも良いし、勉強でも良いだろうし。

例えば数学のトップをいくような、小学校の5年で数学検定何級を通ったとか新聞に載っていましたが、そういうのをめざす子どもが居れば良いし、言語や語学をしっかりとやっていく子どもも出てくるだろうし、それが1人で終わることなく派生して行って、子どもらでまた学ぶのです。学校だけが教えるところではないのです。いろんなところで子どもは学んでいくのです。それを援助してやれるような体制づくりというのを学校はやって行ってやれば良いのです。それをどう具体化するかという話です。

### 【中井委員】

先ほどおっしゃられた中高一貫という観点も起爆剤としてはいいです。実はそういう発想というのは前々からあって、ただあまりにも1発ではできないので財政基盤からという話をさせていただいたのは実はそういうことです。

例えば和歌山智弁ですけれども、あそこが大きくなってきた最大の要因は、副校長が東京の進学校を見て、野球で名を上げることと勉強で名をあげることという経営方針でやられたわけです。その財政基盤は智弁宗という団体でありましたけれども、松下さんの後援を得ていたということで、財政的にはかなり豊かになっていたということでございます。

それと泉州高校、ここ10年ほど色々ありまして、ずっと卒業式から入学式からずっと見させていただいているのですが、目に見えて生徒さんが変わってきています。卒業式とか入学式の立ち居振る舞いを見ていてもよくわかりますから、だんだん進学校になってきているというのが目の前に見えますから、それに伴って先生方も変わってきます。

できないと言っていたら、いつまでたってもできないのです。これは企業でもどういう集団でも同じです。だからどういう具合にしてできることをやっていくか、できることとできないことがあるのは分かっていますから。どっかで総合的に戦略的にこの学校が立ちいくようなことを考えていただいたら、卒業生の方もここにおられる方もハッピーと思います。北野委員がおっしゃられたとおり、本当に人間ってどこでどう変わってという具合になるかもわかりません。だから面白いです。だからそのためにどれだけ手伝ってあげられるか、それだけだと思うのです。

### 【北野委員】

国語、算数、理科、社会、英語ができる方が賢い、それ以外はあかんというような感じで。その子その子の個性がどんどん伸びていくような教育が日本の中で整えば素敵だと思います。算数ができなくても違うところで伸びれば、それだけを一生懸命育てていける、そういう日本になったらいいなと思います。

### 【中井委員】

みんな個性がありますから、その個性をどう伸ばしてあげることが非常に大事なことだと思います。

### 【北野委員】

企業にインターンシップに行って、勉強ができるような学科があったら行ってみたいです。素敵だなと思えば子どもにも勧めるし、お母さんがどう思うか、お父さんがどう思うかというのかなり大事です。その子どもにとってもすごくまた将来の選択肢を広げる中ですごく勉強になると思います。その時にわからなくても20年後30年後に、インターンシップに行ったことが為になったと。

### 【藤田議長】

手間と暇がかかる時代になってきていると、本当に手間と暇をかけて人を育てられるところを少しでも作りたい、制度としてそういうものを設置できれば本当にいいなと思います。そこにはやはり教育に対してお金をかけるという事に理解してもらえる環境づくりというのが求められるとしみじみと感じるわけです。

そういったところもやはり答申としてきちんと改めてもう一度踏まえて書き込むという事は必要だと思いますので、今日いろいろとご意見いただきましたことを踏まえて、また先般、校長先生、教頭先生からお話をいただきましたのでそこをさらに踏まえて、実現性はあるけれどもより理想を盛り込んだ、訴えるようなことに書き改めていくということをやりたいと思いますので、いろいろと頂いた意見を踏まえてということでこの議題はいったん終わらせていただきます。

では議事の2つ目の方に進めさせていただきたいと思います。その他ということで、こちらでは特に用意しておりませんが、何か委員の皆様方からご意見等ございませんでしょうか。ではよろしいでしょうか。

### 【榎本教頭】

本校は商業科を名乗っている大阪府内の公立高校で唯一の定時制高校という特徴がございまして、これをなんとか生かした形で新しい学校のあり方ができないのかと、商業科の中で、先生がおっしゃるような普通科コース、企業会計コースというような感じのコース分というの如果能够できれば他校との差別化というのは図れるのではないかというふうに考えております。

あと現在、定時制高校も3年間で卒業できるというのが大阪府の定時制高校のやり方として、通信制を併修して3年間で卒業できる三修制と呼んでおりますけれども、これが主流となっております、基本が3年間、本校も3年間でほとんどの生徒が卒業していくわけですが、一方でじっくり4年間かけて専門的な事を勉強できるという環境も話を広げるわけではないですけれども、あってもいいのではないかなと個人的には考えております。

これは大阪府の3年間で定時制も卒業できると、三修制に反するような考え方ではあるのですが、一方で1週間に20時間で3年間というのは短すぎると、やっぱり従来の定時制の4年間かけて、もちろん3年で卒業できる制度がある一方で、4年間でより専門的な内容を勉強できるというのもあっていいのではないかと個人的には考えております。

**【武林委員】**

今は4年間で卒業している生徒がどれくらいいますか。

**【榎本教頭】**

数名です。

**【武林委員】**

そうすれば、後はほとんど3年間で卒業ですか。

**【藤田議長】**

いわゆる三修制というのはある種の特例措置という風に考えていいわけですか。

**【榎本教頭】**

大阪府の制度です。もちろん他府県でも似たようなことをされているところはたくさんあるのですが、大阪府のようにすべての定時制高校が3年間で通信制を併修して卒業していくのは大阪府だけだと思います。

**【藤田議長】**

コース制という形にすることで、元の科の方をどうするかというところがカギになってくるかと思うのですが、どれくらいの自由度があるのかという問題で、いわゆる専門学科、専門高校としての看板の中で裁量というのがなかなか難しいと思うのですけれども、普通科的コースという形にした時にどれくらい裁量の中で普通科的な性格を出せるのかということがカギになってくるかと、そのあたりがどうなるのかというのはちょっと調べてみようと思います。少なくとも今、教頭先生がおっしゃっていただいたような、いわゆる多様な学びという部分を担保する、確保することがやはり定時制の大きな役割の1つでありますし目的でもありますので、そこをどう崩さずに良い方向を作り上げるかということを考えなければいけないと思いますので、少し考えさせていただきたいと思います。

**【武林委員】**

学校として今いちばん充足して欲しいと思う部分はどこでしょうか。

情報化をもっと追求していきたいとか、もしくは海外からの子どもたちが来ているとおっしゃっていましたがけれども、一番学校としてこれを何とかお願いしたいという部分はどこでしょうか。



**【榎本教頭】**

教員数です。各学年1クラス規模の学校になっていますので、全学年で4クラスと、ほぼ文科省の定数表通りの配置です。そうになってしまうと授業をしている間はほとんどの教員は出払ってしまい、職員室にいるのは養護教諭と教頭ぐらいの状況ですので、それでこの外国籍の生徒のサポートというのもほぼ難しい状況になっています。

**【藤田議長】**

教職員の加配という部分にどう対応しうるか。教職員の加配に限らずスクールボランティアとかスクールカウンセラーとかそういった部分の加配ですね。

**【榎本教頭】**

もしその多言語化への対応ということであれば、そういう生徒たちへのコーディネーターです。スクールカウンセラーよりもむしろコーディネーターの方が必要ではないかと思っています。

**【藤田議長】**

事例があるかどうか少し調べてみたいと思います。では他はよろしいでしょうか。では議事の三点目、事務日程について事務局の方からお願いします

(議事(3)意見書・次回開催スケジュールについて説明)

**【藤田議長】**

以上で本日に予定していた内容は全て終わりました。委員のみなさまのご協力、ありがとうございました。これにて、第5回岸和田市産業教育審議会を閉会といたします。